

「信州医誌」への雑感

小 泉 知 展

この巻頭言の依頼を受けて以来、何を書こうかと思案し憂鬱な日々を過ごしている間に、ついつい締切日を超過し催促連絡が来てしまいました。いままで、本誌には、綜説、原著、症例報告など寄稿してきましたが、編集に関わったとき最後の「編集後記」を記述することは大変な重荷であったと記憶しています。まして「信州医誌における巻頭言」はさらに敷居が高く、諸先輩方の医療制度や学術研究への論評や心構えおよび本学の目指すべき将来像などを拝読しては、その都度敬服してきました。文才のない私では、とても役不足の執筆依頼です。そうは言ってもと開き治り、今PC机に向かいあっています。

私にとって邦文原著論文の処女作の投稿先が、この「信州医誌」でした。所属教室の肺がん治療成績を後方視的にまとめて論文化し、教室内の二人の上司にもチェックして頂き投稿しました。査読者一人からは、自教室の成績を顧みながら今後の治療法を模索することで意義があると好意的な返事を頂いたのに対して、もう一人の査読者からは大変厳しい査読を頂きました。いやむしろ辛辣とでもいうべき内容の返事で、こんな成績を報告して何の意味があるのか、患者のためにならないまとめであるなどです。確かに一環とした治療方針や治療法が定まっていない時代の臨床的解析であったため、種々の患者背景を有する母集団の臨床成績で、手法自体も未熟で、論文発表の骨子である what is new を引き出せず、内容は poor であったと、今では充分理解できるのですが、当時まとめた限りは、今後の自教室の肺がん診療のあり方を問うまたは基盤となる論文として残したい気持ちで、上司2名を含め共著者みんなで対策を講じました。当時の教室では動物実験系の研究手法が確立し、その実験モデルを用いた基礎研究結果の量産時代になっていたため、私の先輩方はみな英語論文執筆に傾倒していました。しかし、その厳しい査読結果もあってか、この論文の添削・手直しに不思議なほどみんなが協力的でした。査読者から指摘された点への返答や、言い回しや文言の変更等で、何回もやり取りを行い、再提出し、どうにか掲載受理となりました。私および教室にとってもこれが大変良い経験となりました。少なくとも後方視的な臨床データでも、どこに注目するか、どうやって解析するか、そしてその手法をどうするか、そして論文にすることとは何かを学ばせて頂きました。自分にとって、「信州医誌」への投稿は、論文執筆の登竜門であり、礎になりました。ちなみに“酷評”した査読者とは、今でも時におつきあいがある元教授ですが、たぶんこの件は忘れられていると思われ、互いにいままでこの件を話題にしたこともありません。

私はこの4月から新たな診療科を担当し、多彩な病態を呈する入院患者、一方で稀少がんの患者等と、なんとすそ野が広い分野を扱っているのだろうと感じています。当然症例報告として論文にすべき症例に多く遭遇しています。最

近, 学会の機関雑誌への投稿論文の拙劣さが問題となっています。特に症例報告論文の症例提示の未熟さおよび考察不足が目立ちます。投稿規定に準じていないのは論外とし, 私が関係しているいくつかの学会誌も投稿数は増加しているものの明らかに採択率が減少しています。私は日本内科学会の英文誌「Internal Medicine」の査読もたびたび依頼されますが, ここでも症例報告の投稿論文全体をみると明らかに質が低下しています。どうしてなのでしょう? 現在の研修医制度では, いろんなローテイト先を回ることで, 移動先が多く, いざ論文執筆の時に指導医が不在あるいは連絡不足となってしまうこと, また各学会等の認定・専門医取得に論文の実績が求められていることなどから, 若い先生方が症例報告を執筆はするが, 指導者からの十分なチェックがないまま安易に投稿していることが予想されています。また, 執筆者や指導者も, 診療録の退院時要約と学術論文にすることの違いへの理解を欠如している感もあります。

私は, 「信州医誌」の査読や編集委員を担当し, 少なくとも症例報告での内容の質の低下を感じたことはありません。投稿前の指導者の介入も感じられ, また査読者の対応も適切であると思われま。症例報告だけを見れば, 他誌に遜色ない印象を持っています。若手の医師にとっても是非「信州医誌」を活用してもらいたいものです。本「信州医誌」が, 50年以上継続して運用できているのは, 査読者の厳格かつ適切な助言と, 種々のコーナーを設け多彩な内容で出版していることにあると思われま。欧文論文も着実に増加し, 学術的にも貴重な school journal になってきていると思われま。査読者および指導者も含めて本雑誌へのさらなる発展を期待しています。

最後に, 本誌に対する私の反省点と要望を述べま。先に述べたように英文論文掲載も可能となってきていることから, 本誌の PubMed または PubMed Central への登録が運営委員会で検討されました。実際私も自分で行動を起こそうとしましたが結局未完で投げつけてしまったことを大いに反省しています。今後継続して一歩でも前に進めるように要望・協力したいと思います。また, 学位審査論文の紹介コーナーと, 3年次医学部生の自主研究の報告書をこの「信州医誌」に一括して年一度の別冊号としてまとめて発刊することはどうでしょうか? その発刊号を各医学部生の親元に配布することにすれば, 少なくとも今の自主研究報告を DVD 作成で各学生に配布するよりは, 医学教育上も価値あることと考えま。本誌が, 卒前医学教育の情報発信としても意義を見出せると思いま。最後に, 巻頭言についてです。いままでどの記述内容も含蓄があり, 貴重で楽しみにしているコーナーと思っている会員の先生方も多いのではと思いま。しかし, 少なくとも学術雑誌としてみた場合, 巻頭言があまりに多彩な内容で, 一部哲学的になっていないでしょうか? 学術雑誌としての位置付けから, 自分の研究の着眼点, 発端, 経歴, 実績, そして今後の研究の方向性といった内容で統一してはどうでしょうか。本学が関わる「松医会報」等に掲載されている内容と一線を画して, あくまで学術雑誌としての位置付けを確保・維持することが, 本「信州医誌」の進むべき方向性で, 読者(会員)の増加および読者層を, 学生を含めた若手にシフトする努力が必要ではないでしょうか。

(信州大学医学部包括的がん治療学講座教授)